

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 下本 英津子

論 文 題 目

輪中における水制御と水の神性

—水共同体のエートス—

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 阿部泰郎

委員 名古屋大学 教授 羽賀祥二

委員 名古屋大学 准教授 佐々木重洋

委員 名古屋大学 准教授 東 賢太郎

委員 国立民族学博物館 教授 池谷和信

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は5章から成る。第1章「輪中の自然環境と歴史」では、木曽川、長良川、揖斐川から成る木曽三川下流域が、支川で網目状に結びつき、豊かな水系帯を成すと同時に、洪水により変化の絶えない不安定な流動的自然環境にあったこと、また近世以降これを安定化させるための河川工事を営々と行うとともに、この地を開拓する試みとして輪中が形成されてきたこと、しかし輪中の発展が進むにつれてむしろ水害被害が悪化した経緯を述べる。そして近代に導入された土木工学によって河川の抜本的な固定化（三川分離）が完成したが、同時に輪中堤防は切り離されることとなり、水害の減少や生活の近代化とともに輪中が解体されていくに至ったことを指摘する。

第2章以降では、そうしたなかで扇状地に接した地域の輪中であり、近代に輪中として成立し、現在でも囲型堤防を残しており水との関係性を辿りやすい十六輪中を対象として、その歴史的動態を追跡する。まず第2章「十六輪中の環境」では、その地形上の条件（特に水環境）、集落の開拓と輪中築堤の歴史、洗堰があり近年まで続く水害、社会組織、稲作を中心とした生業の内容が調査により明らかにされる。

第3章「水制御の技術」では、水利用として河川、地下水等小規模な水を複合的に利用していること、輪中をとりかこむ水環境の変化と技術革新によりその変遷は激しいことを、それぞれの利用形態の全体像を網羅した図表によって示している。また水防活動は自治体全員の協働でおこなわれており、さらにこうした水利用と水防は、輪中の取排水における厳格な管理技術と結びついていることを指摘している。

第4章「水の神性」では、水に関わる多層な次元で表されるその〈神性〉に着目し、その性質を分析し、両義的であると同時に地域共同体にとって不可欠な存在基盤としての〈水の神性〉の様相を指摘する。特に河川に祀られた神明神社、各井戸に見出される水神、弘法の井戸、輪中築堤に尽力した村人を祀る記念碑などは、この〈水共同体〉にとっての存続に関わる伝統的な水利用に関わる、しかも多元的な各次元の機能に緊密に対応するものであった消息を示唆する。

第5章では考察として、これまでの十六輪中における水系を中心とする自然環境、水の利用とその制御の歴史的変遷を含む実態、社会構成組織と年中行事などの調査成果を整理し、それにもとづいて十六輪中の〈水の神性〉を、住民がこの地域の水環境と水利用にもとづいた上で形成した、生活に埋め込まれた「ヴァナキュラー」（自立的かつ代替不可能）なものと捉えるべきであると理解し、そこでは水制御の技術とその認識の基盤となる〈水の神性〉の融合が実現していること、〈水の神性〉の共有を通して、住民の水制御技術は倫理を志向するエートスが内在することを見通すに至る。

水制御に関する技術は幾度もの革新を経ており、嘗て存在した水利用とそれと不可分な〈水の神性〉のような明確な結合形態は変化しつつあるが、本論に示した両者の密接な関係性を明らかにすることを通して、これまで分離して考察されてきた水利用、排水、水防などの水制御技術と民俗学等の水神信仰の両者が結びつくことを具体的に示し、その焦点となるフィールドとしての輪中研究の意義と価値に対する再認識を提唱して結ぶ。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

木曾三川下流地域の特徴である輪中は、近世初頭から近代にかけて地域住民が作り上げてきた独特な生活空間である。輪中については、その成立過程や社会構造について、人文地理学や歴史学、社会学などの研究が蓄積されているが、なおその環境の特質と密接に関わる文化的側面から、輪中に生きる人々の精神的営為の次元へ考察が及ぶことは少なかった。本論文は、今も懸廻し堤防によって四周を囲まれ輪中本来の姿をとどめる岐阜県大垣市の十六輪中を対象として、輪中住民の生活における心性とその水系を中心とする環境との関係を、水制御と水の神性というふたつの視点から解明しようと試みた意欲的な論文である。

十六輪中は、内陸部に面した境界地帯に、近代に至って周辺地域との交渉の末に築かれた、比較的新しく成立した輪中である。その特色を、その多様な水系の構造を絵図を含む歴史資料と現地調査に基づき、稲作を基盤とする生業から、地域共同体の社会組織、年中行事と祭祀儀礼など多くの側面から、水をめぐる輪中の生活世界の全体像の記述を試み、それは自ずから現代の輪中の民族誌となっている。住民に取材した語りが逐次参照され、それにより伝承と現在の意識が反映されることも、今日、大きな変容を迎えている輪中の動態をよく捉えている点で評価される。

特筆すべきは、輪中の環境と生活世界を、水制御技術と水の神性という二つの位相から捉え、両者を統合的に考察しようとする新たな分析枠組を提起したことである。その結果として、本輪中において明らかにされた水制御技術の諸水準が共同体の作業や祭儀を介して、諸位相の水の神性に対応し連関することを指摘したのは、先験的に導きだせる論理ではあるが、やはり価値ある発見である。

「水共同体」と命名された、両者の融合した輪中の生活世界のありかたを、イリイチの概念を借りて、経験に根ざした自立的でかけがえのない知として、輪中住民の水制御と水の神性を統合的に把握し、そこに倫理的な生への志向つまりエートスを見出すところに、本論文の独創性がある。輪中に生きる人々の営みを総合的な人文学を志向する許に論じようとする試みは、高く評価されてよい。

一方、なお改善すべき点も多い。問題は、あらゆる方向から万遍なく記述し論じようとする余り、議論の焦点が拡散し、本論文が既存のいかなる学問分野において新たな達成を示したのかが明確でなくなった点であろう。それは歴大なフィールドワークの成果の分析が充分になされず、抽象的な議論に飛躍してしまうことにもつながっている。たとえば、水制御と水の神性の要となる接点として、弘法井戸を軸に論を展開できるところを見逃していることが惜しまれる。しかし、これらは本論文の美点と表裏をなすものであり、むしろ本論文は、人文学の総合化への可能性を拓く、その試行として十分な達成を示している。以上の諸点から、本論文は、博士（文学）の学位にふさわしい成果であると、審査委員一同、一致して評価した。